教　育　と　文　化

11代齋藤用之助の遺品を展示
つながります。用之助・久米島・伊万里

11代齋藤用之助の遺品が、1月18日から26日までの9日間、市歴史民俗資料館で展示されました。

11代齋藤用之助は、佐賀市の出身で沖縄県の近代化に大きく貢献した人物。特に1903年に硫黄鳥島が噴火した際、島民700人を久米島に避難移住させた功績で知られており、久米島の人たちには恩人として慕われています。

なぜ本市で展示されることとなったのか。それは、用之助の子孫である佐賀市在住の14代齋藤用之助さんが、昨年10月の首里城火災で多くの琉球王国関連収蔵品が焼失したことに心を痛め、11代の遺品のうち4点を、沖縄県立博物館へ寄贈する決心をしたことから始まります。

遺品が沖縄県に渡る前に佐賀県の人にも見てほしいと思った14代が、県内で展示できる場所を探していたところ、佐賀大学海洋エネルギー研究センターの池上康之教授から久米島町と関係の深い本市を紹介され、歴史民俗資料館に展示される運びとなりました。本市と久米島町、佐賀大学の3者は、海洋温度差発電の研究をきっかけに、多面的な交流・連携を図るための協定を結んでおり、その事業の一つとして企画展を実施したものです。寄贈される遺品は、戦火のため戦前の資料があまり残っていない沖縄県では、いずれも貴重なものだとのことです。

1月15日、市役所を訪れた14代齋藤用之助さんは、深浦弘信市長に「佐賀の人に見せないまま沖縄へ贈るのはもったいないと思った。これからも佐賀と沖縄が文化の面でつながっていけたらいいと思います」と話しました。

↑市歴史民俗資料館にコーナー展示された11代齋藤用之助の遺品

郷土の文化財

伊万里の城館跡シリーズ⑱

大川内岳城跡

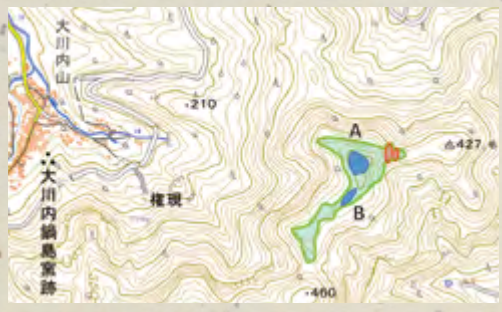
●問合先　生涯学習課文化財係（☎㉓3186）

大川内岳城跡は大川内町乙字大河内山に所在する中世の山城跡で、青螺山から北東に延びる尾根上に位置し、周囲を落差30㍍以上の断崖絶壁で囲まれています。

城跡は細尾根上に多くの曲輪を配置しており、その中でも北東部に展開している広めの曲輪が主郭Aになります。この主郭の東に延びる尾根は両端に竪堀を伴う堀切で寸断され、敵軍の進行を阻むつくりになっています。主郭Aの南側には腰曲輪が付随し、隣接する形で曲輪Bが尾根上に細長く続きます。曲輪Bから南西に向かっては小規模の曲輪と腰曲輪が連続しており、狭く細長い空間をうまく利用した山城だったことが推測できます。

文献上、貞応二年（1223年）十一月二日付け源重平譲状案（大川内家文書）で『大川内山之事』という記述があることから、大川内氏とこの地域との関連は確実視されていますが、築城に関する史料は確認されていません。

大川内岳城跡は、断崖絶壁で囲まれた尾根上にあることから見学向けの山城跡ではありません。



↑大川内岳城跡の城域（緑：城の範囲、青：主郭A・曲輪B、赤：堀切と竪堀の範囲）